古代アメリカ学会会報

第 25 号

「ナスカ市郊外オコンガヤの灌漑水路」（2007 年 4 月撮影）©馬瀬智光

目次

◆会員からの投稿
◆『古代アメリカ』の原稿募集
◆役員会報告
◆第 13 回総会報告
◆第 13 回研究大会報告
◆会計報告
◆新入会員
◆事務局からのお知らせ

2009 年 3 月

＊本稿掲載文・写真の無断転載・複製を禁じます。

マヤ文明研究の公式な学術的認知と学術情報の普及

青山和夫（茨城大学人文学部教授）

① 日本学術振興会賞受賞

私は、1986 年以来の研究成果「古典期マヤ人の日常生活と政治経済組織の研究」により、2007 年 12 月 25 日に第 4 回（平成 19 年度）日本学術振興会賞を受賞しました（http://www.jsps.go.jp/jsps-prize/ichiran_4th.html）。同賞は、「国内外の学術誌などに公表された論文、著書、その他の研究業績により学術上特に優れた成果をあげた」と認められる 45 歳未満の博士の学位取得者を対象に毎年公募されます。そのねらいは、「日本の学術研究の水準を世界のトップレベルに発展させるために、創造性に富み優れた研究能力を有する若手研究者を早い段階から顕彰し、その研究意欲を高め、研究の発展を支援していく」ことです。対象分野は人文・社会科学系、理工系及び生物系の 3 分野で、第 4 回日本学術振興会賞の被推薦者は 415 名、受賞者は 23 名（そのうち人文・社会科学系は 5 名）でした。受賞者には、賞状及び賞牌、副賞として研究奨励金 110 万円が贈呈されました。

② 日本学士院学術奨励賞受賞

私は、2008 年 2 月 12 日に、第 4 回（平成 19 年度）日本学士院学術奨励賞を受賞しました(http://www.japan-acad.go.jp/japanese/news/2008/021201.html)。同賞は、「日本学術振興会賞受賞者の中から、特に優れた者 5 名以内」に授与されます。第 4 回日本学士院学術奨励賞の受賞者のうち 4 名は自然科学系の研究者であり、人文・社会科学系の受賞者は私 1 人でした。マヤ学者として、古代アメリカ学会、日本文化人類学会、日本考古学協会の会員として、さらに東北大学文学部卒業生、茨城大学の教員としても初の受賞です。古代アメリカ研究、特にマヤ文明研究の領域が、日本において公式な学術的認知を受けたことが重要といえるでしょう。

第 4 回日本学術振興会賞並びに日本学士院学術奨励賞の授賞式は、秋篠宮同妃両殿下のご臨席のもと、日本の学問の殿堂である日本学士院で2008年3月3日に挙行され、私は妻ビルマと一緒に出席しました（写真 1）。日本学士院学術奨励賞では、ガラス張りの楯状の賞状及び賞牌、副賞として記念品が贈呈されました。ちなみに記念品は、「日本学士院」と金字で刻まれたパーカーの万年筆でした。授賞式終了後は記念パーティーが開かれ、その食事が「これほどおいしいものを食べたことがない」というくらい素晴らしかったことをここにご報告します。

写真 1. 第 4 回日本学術振興会賞並びに日本学士院学術奨励賞の授賞式(2008 年 3 月 3 日)、妻ビルマと筆者、日本学士院 ©青山和夫

私の研究成果を地域に還元するために、2008 年 7 月 2 日から 26 日まで茨城大学図書館において日本学士院学術奨励賞受賞記念展示会「マヤ文明—世界は四大文明だけではなかった」が開催されました（写真 2）。

図 2. 日本学士院学術奨励賞受賞記念マヤ文明展のオープニング・セレモニー(2008 年 7 月 2 日)、左から図書館長、学長、筆者、人文学部長、茨城大学図書館 ©青山和夫

国立大学史上初のマヤ文明展であり、学長裁量経費と人文学部長裁量経費が用いられました。7 月 5 日の拙記念講

演会には、茨城大学の公開講演会としては異例の 200 名もの方々が集まられ、参加者全員にグアテマラのコーヒーが振舞われました。講演会終了後に行われた著書販売やサイン会は大盛況で、拙著書は飛ぶ様に売れました。(http://www.lib.ibaraki.ac.jp/news/2008/0801/oc080801.html)

③グアテマラ地理歴史アカデミー会員に選出

私は、2008 年 12 月 3 日に、グアテマラ地理歴史アカデミー（Academia de Geografía e Historia de Guatemala）会員に選出されました。同アカデミーは、グアテマラの学士院に相当し、猪俣健（アリゾナ大学）会員に次ぐ栄誉です。日本人によるマヤ文明研究が、グアテマラにおいても公式な学術的認知を受けてきているのです。

④　マヤ文明の石器分析を通した政治経済組織の研究

私は、1986 年から 1995 年まで、ホンジュラスのユネスコ世界遺産コパン遺跡とラ･エントラーダ地域、1998 年からグアテマラのアグアテカ遺跡やセイバル遺跡の国際共同調査団の共同調査団長・団員として、マヤ文明の調査研究に従事してきました（写真 3）。最近までマヤ文明の研究分野では、主要利器であった石器の研究は十分とはいえませんでした。私は、マヤ文明の政治経済組織の一側面を解明するために、これまでに 127,499 点の石器を分析してきました。分析対象全ての黒曜石製石器の産地を肉眼で同定し、中性子放射化分析によってその精度（98%）を確認しました。また石材の比率、石器組成、1m^3 当たりの石器の出土量をはじめとする定量分析を導入しました。私は、世界のパイオニアの 1 人として、マヤ文明の複製石器の体系的な使用実験を行い、高倍率の金属顕微鏡を用いて計 7,062 点の石器に残る微細な傷跡（使用痕）を分析してきました。これらの分析を通して、古代マヤ国家の起源・発展・衰退の過程、社会・政治・経済組織、手工業生産、職業の専門化、ジェンダーの分業、日常生活、都市性や戦争について実証的に研究しています。

コパン谷と周辺地域から出土した先古典期前期　（前 1400～前 1000 年）から後古典期前期（後 1000～1100 年）の石器の通時的研究によって、コパンの宮廷は、グアテマラ高地のイシュテペケという良質の黒曜石産地に比較的近い（80km）という立地を大いに利用して、石刃核（両側辺がほぼ平行する規格的な縦長の薄い石刃を大量に剥ぎ取るための石核）を産地から直接獲得してコパン谷内に分配し、ラ・エントラーダ地域などの近隣地域に供給していたことが明らかになりました。王を中心とする宮廷は、少なくとも一部の実用品（イシュテペケ産黒曜石製石刃核）の地域内・地域間交換を集権的に統御し、それは他の要因と相互に作用して、古典期マヤ国家コパンを発展させ、維持する上で大きな役割を果たしました。少なくとも古典期のコパンでは、実用品であった石刃核の入手・流通は、宗教及び血縁関係や個人的な人間関係だけに基づいていたのではなく、それらを超越した、かなり中央集権的な経済組織によりなされていたのです。

写真 3. グアテマラのセイバル遺跡（筆者撮影）　　©青山和夫

アグアテカ中心部では、石槍などの大量の武器が見つかり、長大な防御壁、碑文、図像資料、敵による中心部の徹底的な破壊、9 世紀初頭に起こった都市の短時間の放棄と共に、破壊的な戦争が、アグアテカの衰退の直接の原因であったことを強く示唆します。石器や他の遺物の分析によれば、支配層の女性は調理だけでなく、様々な美術品や工芸品の生産の一翼を担いました。古典期のマヤ支配層を構成した書記を兼ねる男性工芸家は、他の社会的役割（戦争、天文観測、暦の計算、他の行政・宗教的な業務）も担っていました。古典期のマヤ支配層を構成したアグアテカの男性と女性の工芸家は、異なった状況や必要性に柔軟に対応して複数の社会的役割を果していたのです。また都市機能という面からみるとアグアテカは、コパンと同様に、実用品と美術品からなる半専業の手工業製品の生産と消費の中心地でした。2 つの都市には、宮廷の宗教儀礼や政治活動だけではなく、経済活動もかなり集中していたのです。

⑤　学術情報の普及

私は、2008 年末までにマヤ文明やメソアメリカに関する著書、論文、その他の研究業績を計 108 本、出版して

います（http://info.ibaraki.ac.jp/Profiles/5/0000403/ profile.html）。著書としては、ピッツバーグ大学から英語・スペイン語で出版された博士論文の修正加筆版（Aoyama 1999）、日本初のメソアメリカ考古学の教科書（青山・猪俣 1997）、私の 20 年に及ぶ研究成果をふんだんに盛り込んだ最新のマヤ文明と古代メソアメリカ文明の入門書（青山 2005, 2007）、日本初のアメリカ大陸の古代文明事典（関・青山 2005）など 8 冊あります。2008 年 12 月には、エリック・トンプソンの名著『マヤ文明の興亡』の邦訳を、最新の調査研究成果を反映した懇切な訳注、解説、最新文献を付けて上梓しました（トンプソン 2008）。

論文は 66 本を数え、査読論文が 37 本を占めます。外国語論文では、*Latin American Antiquity*（Society for American Archaeology）、*Ancient Mesoamerica*（Cambridge University Press）、*Journal of Field Archaeology*（Boston University）、*American Anthropologist*（American Anthropological Association）、ドイツの *Mexicon*（Anton Saurwein）、フランスの *Journal de la Société des Américanistes*（Société des *Américanistes*）、スペインの *Mayab*（Sociedad Española de Estudios Mayas）、メキシコの *Estudios de Cultura Maya* や *Cuadernos de Arquitectura Mesoamericana*（共に Universidad Nacional Autónoma de México）、*Los Investigadores de la Cultura Maya*（Universidad Autónoma de Campeche）及び *Historias*（Instituto Nacional de Antropología e Historia）、グアテマラ、ホンジュラス、ベルギーや スイスなどにおいて、スペイン語論文 29 本、英文論文 17 本などを出版しています。

その他の研究業績は、*Current Anthropology*（University of Chicago Press）の英文コメント論文 3 本、日本学術振興会の *JSPS Quarterly* に掲載された私の研究成果の英文紹介、日本語の雑誌や新聞に掲載された総説・解説、書評など計 34 本あります。研究発表としては、国外の国際学会 43 本（アメリカ、カナダ、スペイン、ベルギー、メキシコ、グアテマラ、ホンジュラス、プエルトリコ、韓国）、国内の国際学会 3 本を含め計 65 本を数えます。私は、一般書や雑誌の総説・解説だけでなく、マヤ文明に関するテレビ番組の監修や資料提供、新聞の取材協力、東北大学、北海道大学、山形大学、放送大学の集中講義、茨城県民大学、ひたちなか市民大学、北茨城市民大学、常陸大宮市民大学の講師、各種の講演会、公開講座、大学模擬授業などを通じて、研究成果を日本社会に還元すべく微力ながらも積極的に努力してきました。

⑥学術情報の普及に関わる戦略検討ワーキンググループ

大変残念ながら、マヤ文明をはじめとする古代アメリカの諸文明は「神秘的な謎の文明」というレッテルを貼られ、いろいろと誤解されています。テレビ番組の視聴率や一般書・雑誌の売り上げを稼ぐために、謎・不思議・神秘をおもしろおかしく強調した、「歪められた」古代アメリカ文明観が再生産され続けています。今なお日本社会において学術研究と一般社会の知識の乖離が大きいというのが現実です。その一大要因は、世界史の教科書において西洋人が侵略する前のアメリカ大陸の記述が、質量共に極めて貧弱なことです。

バランスの取れた「真の世界史」を再構成するためには、アメリカ大陸と旧大陸の古代文明を対等に位置付けなければなりません（青山 2008a, 2008b, 2009）。歴史教育と研究成果の普及は、古代アメリカ学会・会員の重要な使命です。2008 年 12 月 6 日の古代アメリカ学会総会において、「学術情報の普及に関わる戦略検討ワーキンググループ（以下 WG）」を役員会のもとに発足させ、教科書問題を含めた学術情報の普及戦略を検討することが決議されました。私は、役員会の運営委員（研究担当）として、WG の座長に任命されました。WG は、私、吉田栄人（東北大学）、坂井正人（山形大学）、井上幸孝（専修大学）、多々良穣（榴ヶ岡高校）の 5 名の会員によって構成されています。2009 年 9 月末までに世界史の教科書問題、マスコミ報道の改善・対応、学会主催のシンポジウム開催などについて、短期、中期、長期的展望に立って答申案を練り上げていきます。古代アメリカ学会の会員によって次々と生み出される学術情報が日本社会に充分に普及し、知の再生産が効果的に行われていくように、会員の皆様のご尽力とご協力をよろしくお願い申し上げます。

（引用文献）

Aoyama, Kazuo
1999 *Ancient Maya State, Urbanism, Exchange, and Craft Specialization: Chipped Stone Evidence from the Copán Valley and the La Entrada Region, Honduras/ Estado, Urbanismo, Intercambio, y Especialización Artesanal entre los Mayas Antiguos: Evidencia de Lítica Menor del Valle de Copán y la Región de La Entrada, Honduras.* University of Pittsburgh Memoirs in Latin American Archaeology No. 12, Pittsburgh, PA.

青山和夫
2005『古代マヤ　石器の都市文明』京都大学学術出版会.

2007『古代メソアメリカ文明　マヤ・テオティワカン・アステカ』講談社選書メチエ.
2008a「『真の世界史』を学ぶ：マヤ文明は洗練された『究極の石器の都市文明』」『日本学士院ニュースレター』 1:7.
2008b「マヤ文明研究と『真の世界史』」『チャスキ』37: 6-14.
2009「外国考古学の動向: アンデスとメソアメリカ」『日本考古学年報（2007 年度版）』60, 印刷中, 日本考古学協会.
青山和夫・猪俣健
1997『メソアメリカの考古学』同成社.
青山和夫・関雄二
2005『岩波　アメリカ大陸古代文明事典』岩波書店.
トンプソン、エリック
2008『マヤ文明の興亡』（青山和夫訳）新評論.

ペルーの観光遺跡が抱える問題

多々良　穣（東北学院榴ケ岡高等学校教諭）

2008 年暮れ、インカ帝国に関連する世界遺産のあるペルーを訪れた。古代アメリカ文明を研究していながら、南米を訪れるのは生まれて初めてであった。ペルーには、複合遺産も含め 10 ヶ所の文化遺産があるが、そのうち「リマ歴史地区」、「クスコ市街」、そして「マチュピチュ」に足を運んだ。今回の旅の一番の目的は、遺跡の観光開発と保存の問題について考えることだったが、人気抜群のマチュピチュのイメージと実際の姿とのギャップがどの程度あるのかも確かめたかったし、授業で使える材料探しや、一旅行者として純粋に楽しむことも重要な目的であった。本学会会員諸氏の多くは、ペルーにある遺跡をよくご存知だろうから、本稿で遺跡の細かい紹介をすることは不要であろう。

いくつかの旅行社に確認したところ、海外旅行者の総数が減っているにもかかわらず、最近ペルーへの観光客は増加しているという。また、リマにある天野博物館の梅原氏の話でも、日本人の来館者はツアーの増加とともに増える傾向にあるという。この理由の一つとして、一度は行きたい世界遺産 NO.1[1]と言われる「マチュピチュ」を前面に出しての宣伝広告が効果的だと考えられる。また、日本でも最近人気が出ている「ナスカの地上絵」[2]もまわるツアーも多く、いわゆる歴史的ロマンを求めて観光客が増加しているのであろう。このことは、観光を重要な収入源とするペルーにとっても喜ばしいことである。しかし、観光客数が伸びるにつれて、当然のことながら遺跡保存に大きな問題を投げかけることになる。

今回のペルー訪問において、「リマ歴史地区」でもっとも印象に残り、遺跡保存の観点からも記しておきたいのは、「サンフランシスコ教会」である。教会のファサードは、バロック式の装飾が見られ、非常に美しく見ごたえ十分である。しかし、何と言っても必見なのは、地下にある「カタコンベ」であろう。ローマやエジプトなどで見られるカタコンベは、地下墓所というよりも地下礼拝所の要素が強いように感じられたが、このカタコンベはまさに「地下墓所」であった。写真撮影が禁止されているためこの紙面でお見せできないが、何万体にも及ぶ人骨が直方体や筒型に掘られた空間に納められている。このカタコンベにはガイドと一緒でなければ入ることができず、管理や保存はある程度行き届いているように見受けられた。ただし欲を言えば、英語ガイドの英語力が乏しいため、十分な説明が聴けなかったのが残念であった。わざわざスペイン語ガイドと区別されているのだから、より英語の研修には力を入れるべきだろう。逆に私自身は、スペイン語をもっと勉強すべきだが。

写真1.「ナスカ地上絵の謎」展の「東北学院榴ケ岡高等学校特別見学会」で解説する坂井正人氏（筆者撮影）　©多々良穣

[1] プロが選ぶ「世界遺産ベスト 30」参照（http://www.nhk.or.jp/sekaiisan/best30/index.html）。

[2] 2008 年 7 月に自然史博物館（仙台市）で実施された「ナスカ地上絵の謎」展の弊校特別見学会でも、多くの高校生が関心を持って学習した（写真１）。

写真2　コリカンチャ内部の傾斜した石壁（筆者撮影）　©多々良穣

写真3　タンボマチャイで土産物を売る人々（筆者撮影）©多々良穣

「クスコ市街」で記しておきたいのは、やはりコリカンチャである。現在サント・ドミンゴ修道院となっている建造物の土台は、インカ時代に築かれた石組みがそのまま用いられ、教会（上部構造）はスペイン人が植民地時代に建てたものである。外から眺められる見事な曲線美を誇る石組みは有名だが、教会内部ではインカ時代の石組みによる部屋を見ることができる。この部屋の石壁は、地震対策のために内側に傾斜をかけて造られているというのが、ガイドの説明であった（写真２）。しかし気になったのは、観光に疲れた入場客が壁にもたれかかったり、触ったりしていたことである。筆者が見る限りでは、コリカンチャ内部の警備は不十分だったし、ガイドもこのような観光客の態度を咎めなかった。石壁はインカ期のものと現代のものと混在しているとのことだが、仮にインカ期のものでなかったとしても、一般の人々には区別はほとんどつかないので、インカ期の壁と同様に「触れないで下さい」という掲示をする必要があるだろう。そうすることで、遺跡を保存・維持し、後世に遺していくという意識が高まると思われる。

クスコ周辺の遺跡では、サクサイワマンやティポン、オリャンタイタンボなどを訪れた。サクサイワマンは大量の大規模な石を組み合わせた要塞が、ティポンではアンデネス（段々畑）とそれを流れ落ちる美しい水路が、そしてオリャンタイタンボはやはりアンデネスと斜面に築かれた神殿が、それぞれ見所である。この三つの遺跡は、ホイッスルを持った警備員が配備され、観光客が写真撮影のために石組みに登ろうとすると、厳しく注意されていた。

しかし、その他の遺跡、例えばタンボマチャイなどは、石組みのそばに大きなビニールシートが広げられ、土産物を売ろうと販売に懸命な人々が大勢いた（写真３）。見た目に重要だとわかる建造物には縄をはって侵入できないようにされていたが（写真４）、単なる石組みについてはほとんど注意を払っていなかった。

写真4　縄で立入禁止を表すタンボマチャイの水路（筆者撮影）

©多々良穣

そして、筆者が訪れた時間は、少なくとも警備員は存在しなかった。警備にかかる人件費が大きな問題なのは承知しているが、観光客に公開されかつ宣伝されている遺跡には、しっかり保存のための方策をたてるべきである。ちなみに、観光ルートになっているケンコー、プカプカラにも、入場料をとる事務員やガイドはいても、遺跡を警備する人物は見られなかった。

注目度 NO.1 の「マチュピチュ」は、やはり遺跡の規模も大きいこともあって、多くの警備員が配置されていた。他の遺跡とは違い、それなりに観光客側も建造物を傷つけないよう配慮していたように思う。しかし、ガイドブックに載っているような見ごたえのある建造物の前では目を光らせている警備員も、目立たない土台や石組みへの注意力は散漫であった。通り道にもなっている石組みの数ヵ所では、すでに崩落が始まっていた（写真５）。また、気になったのは、あれだけの有名で価値のある遺跡にもかかわらず、観光客に遺跡保存の大切さを意識させる標識が見られなかったことである。やはり遺跡入口だけでなく、遺跡内の目立つところに注意を促す標識を立てるべきであろう。たとえ、それが遺跡の景観を損ねることになったとし

ても、必要だと思われる。もし景観を重視するなら、観光客に不評であっても、中米のマヤ文明遺跡で推進されているような立入禁止区域を設けることも考えなければならないだろう。

写真5　破壊されたマチュピチュの石組み（筆者撮影）　©多々良穣

ここまで、遺跡保存の立場から論じてきたが、実際観光収入への依存度が大きいペルーの人々にとって、遺跡保存の立場から観光客の入場や立入を制限することは難しいだろう。正直、観光客を増加させる立場と遺跡を保護していく立場とを天秤にかければ、大多数のペルーの人々は前者を優先することは容易に想像できる。一旅行者として考えれば、マヤ文明における有名な遺跡のピラミッドへの登頂が禁止されているのはつまらない。アンデスの遺跡についても同様のことが言えるのであり、旅行者にとっては現状の見学方法が望ましいはずである。そうだとすれば、遺跡保存の啓発と警備の重点化が当面の課題だと言えよう。

写真6　島を造る工程を説明する住民（筆者撮影）　　©多々良穣

観光に力を入れるのは十分理解できるが、やや興ざめだったのがチチカカ湖に浮かぶ人工の島ウロスでの出来事である。ウロス島では、島で暮らすアイマラ族がトトラという葦で造った家や暮らしそのものを公開している。現代社会の喧騒を避け、昔ながらの生活を保っている民族を期待して、観光客はここを訪れるのである。確かに、トトラで造られた人工の島、トトラで作られたバルサという舟に、筆者も感動した。しかし、そこには観光用に仕組まれた数々の仕掛けがあった。決められた観光ルートには、いくつかの指定された人工の島があり、それぞれの島にはバルサの作り方、家の造り方、そして浮島の造り方を解説するガイドが待っている（写真６）。彼らはそれぞれの島の住人らしいが、そのガイド料（正規料金などなくチップでまかなわれる）は重要な生計の一部をなす。また、観光客にアイマラ族の服を着せ、記念写真を撮影させる。さらに、有料でバルサに観光客を乗せ、現在も漁で使用するとされる舟での遊覧を楽しませる。いずれにも、当然チップが必要である。しかしながら、筆者は不幸にも見つけてしまった。島の陰に繋がれたモーターボートをである。バルサを使わないとまでは言わないが、観光客なき時間には、あのモーターボートを漁に利用するのではあるまいか。そんな疑念も頭に浮かぶのである。彼らアイマラ族にも生活があるのは、頭ではわかっている。しかし、それでもアイマラ族の生活の一端を見ることができたという満足感は、一瞬にして消え失せていった。あらためて、観光と保存という対立した問題は難しいことを感じた。

観光によって収入を得、保存によって遺跡を次の世代に引き継ぐ。このコンフリクトが内在する問題に共通するテーマは、古代文明を理解してもらうことであると、筆者は考えている。観光客が増加することは、実際に遺跡を見る機会も増えることになり、遺跡の理解につながる。その遺跡をできる限り長く同じ状態で見せることで、理解は保たれるのである。ただ、その理解はロマンに満ち溢れた想像に大きく影響される。古代文明を正しく理解してもらうことは、研究者としての我々の大きな使命である。今年度、筆者は青山和夫氏を代表とする「古代アメリカに関する学術情報普及検討ワーキンググループ」の一員として、正確な古代アメリカ文明像を多くの方々に理解していただくことを目指している。高校世界史の教員の立場からも、遺跡が保存の危機に直面していることも含めて、正しく興味を抱かせる情報を発信していきたいと考えている。

最後に、今回のペルー行きに際して、現地に関する情報を提供し便宜をはかっていただいた本学会会員の坂井正人氏と徳江佐和子氏に、この紙面を借りてあらためて感謝申し上げたい。

『古代アメリカ』の原稿募集

会誌『古代アメリカ』第 12 号（2009 年 12 月発行予定）に掲載する原稿を募集します。投稿希望者は、会誌に掲載されている寄稿規定、執筆細目をよくお読みください。論文原稿は、随時募集し、査読を終えたものから（原稿受領後１～２ヵ月で査読終了予定）順次掲載する予定です。

投稿希望者は、編集委員会宛（下記佐藤宛）にメールまたは郵便にてご連絡ください。編集委員会より、「投稿カード」を配布致しますので、これを提出原稿に添付してください。

なお、原稿掲載の可否は、規定による査読結果を踏まえて、編集委員会が決定します。

＊投稿に関する連絡先：
佐藤悦夫
〒930-1292　富山市東黒牧 65－1
富山国際大学現代社会学部
Tel：[redacted]、Fax：[redacted]
E-mail：[redacted]

役員会報告

2007 年度第 2 回役員会議事事抄録

開催日時：2008 年 12 月 5 日（金）15:00－17:50
開催場所：早稲田大学戸山キャンパス　39 号館
　　5F　第 6 会議室
出席者：大貫良夫、関雄二、坂井正人、鶴見英成、
　　佐藤悦夫、伊藤伸幸、寺崎秀一郎、山本睦、
　　荒田恵、佐藤吉文、浅見恵理
委任状提出者：青山和夫、馬瀬智光、大平秀一
議長：関雄二
書記：浅見恵理、佐藤吉文

定足数の確認（代表幹事　関雄二）
第 6 期および第 7 期役員の出席者と委任状提出者を合わせて過半数を超えており、役員会の成立が確認された。

1.　前回役員会議事録の確認（代表幹事　関雄二）
2007 年 12 月 7 日に開催された第 6 期第 1 回役員会議事録について確認が行われた。

2.　2007 年度各委員会事業報告
（1）学会誌編集（編集委員　佐藤悦夫）
2007 年 12 月に会誌第 10 号の発行、および第 11 号の編集と発行準備が実施されたことが報告された。また、編集業務補助者計 2 名を採用、その業務謝礼金として計 23,600 円（時給 800 円×29.5 時間）の支出があったことが報告された。
（2）会報編集・発行
（会報委員　大平秀一：代理　事務幹事　山本睦）
2008 年 2 月に会報第 23 号、8 月に会報第 24 号を編集・発行した旨が報告された。
（3）研究大会（事務幹事　山本睦）
2007 年 12 月 8 日に第 12 回研究大会が、国立民族学博物館第 5 セミナー室で開催され、会員 44 名、一般参加者 23 名が参加したことが報告された。また同大会が、同館開館 30 周年記念事業の一環として実施されたことが報告された。
（4）広報（HP）（広報委員　伊藤伸幸）
ホームページ維持費用としてサーバー利用料 7,560 円の支出、および同ページの管理作業補助者 1 名に謝礼金 7,280 円（1 日）の支出があったことが報告された。なお、非会員から森下美術館の名称およびホームページ・リンクの変更の指摘があり、対応した。
（5）名簿作成（事務幹事　山本睦）
名簿作成に関する日程と手順が報告された。また、名簿作成時の問題点として、会員情報フォームの返信率の低さと記入必須事項の未記入が指摘された。

以上の各部門の報告に対する審議を経て、2007 年度事業報告は承認された。

3.　新役員会への引継ぎ事項・申し合わせ事項の確認
（1）学会誌編集（編集委員　佐藤悦夫：継続）
次の 3 点が提示された。①投稿可能なテーマ・分野の拡大について、考古学/先史学だけでなく「関連諸分野」の投稿を奨励、②学会員以外への投稿者枠の拡大は認められない、③編集委員の投稿については、非投稿者である編集委員が投稿者の論文査読者を決定するなど、編集委員会内で調整することが申し合わされた。
（2）会報編集
（会報委員　大平秀一会員から馬瀬智光会員へ交代）
当初「共催」として会員に通知した 2008 年 11 月およ

び 12 月開催のワークショップおよびシンポジウムの「協力」名義の変更について、会報第 25 号で訂正することが申し合わされた。

(3) 研究大会

（研究委員　寺崎秀一郎会員から青山和夫会員へ交代）

次回大会で掲示・配布するポスターおよびチラシに使用する写真は発表者に提供してもらうことが申し合わされた。

(4) 広報・ホームページ（広報委員　伊藤伸幸：継続）

学会ロゴの検討･作成問題が継続審議事項として表明された。

(5) 名簿作成

（事務幹事　山本睦会員から佐藤吉文会員へ交代）

実用的な会員名簿を作成するため、会員による最低限の情報提供（現住所、電話番号）意識の向上を促すことが了承された。さらに名簿作成時期について、会員情報フォームの作成協力依頼を 2009 年 3 月に、回答締め切りを 4 月上旬に、会員名簿の発送を同月中に実施することを申し合わせた。

以上、前期役員会と次期役員会との間での引継ぎ・申し合わせ事項が確認された。

4. 2007 年度決算報告ならびに監査報告

荒田恵会計委員より､2007 年度決算報告が行われた。また坂井正人監査委員および鶴見英成監査委員より、2008 年 11 月 23 日国立民族学博物館において会計監査が実施されたことが報告された。

前役員会同様、関雄二代表幹事より会費徴収に関わる問題が指摘された。2007 年度は会誌第 11 号の編集を事業者に委託したことで同印刷・製本費が高騰した。そのため、2008 年度に向けて会費徴収の確実化が急務である点が指摘された。

以上の報告・審議を経て、2007 年度会計決算報告は承認された。

5. 役員選挙について

（選挙管理委員長　馬瀬智光：代理　同委員　荒田恵）

2008 年度役員選挙の日程と手順が報告された。

6. 会員について（事務幹事　山本睦）

新入会員、退会者、会費滞納会員、連絡先不明会員について報告が行われ、了承された。特に連絡先不明会員については、住所ないしメールアドレスが判明している会員には、事務局から情報提供を求める文書を送付することが決定された。役員が個人的に連絡先を把握している 3 名については、各役員が連絡を取ることになった。また、3 名の除名対象会員について審議され、承認された。

7. その他（代表幹事　関雄二）

(1) 学術情報の普及について

昨年度の総会で提案された「教科書におけるアメリカ大陸の古代文明の記述の充実化」への対応として、一般社会への学術情報普及を主目的に、「学術情報の普及に関わる戦略検討ワーキンググループ(以下WG)」の発足と、学会主催シンポジウムの開催を総会に提案することで一致した。WG は、本問題を提起した青山会員を中心にメンバーを構成し、2009 年 9 月末日までに答申を提出することが決定された。

(2) シンポジウムの協力名義について

会員による本学会のシンポジウム協力要請 2 件について報告された。いずれも事業計画に組み込まれていないこと、さらに 1 件については申請者側より名義変更の希望が出され、「主催」「共催」ではなく「協力」となったことが報告された。

(3) 公益法人に関するアンケート

内閣府公益認定等委員会による公益認定ガイドラインの策定に関連して、日本学術会議「学協会の公益機能検討等小分科会」よりアンケート依頼があり、関雄二代表幹事が回答したことが報告された。

(4) 国際コンソーシアムへの取り組みについて

日本学術会議より本会の国際コンソーシアムへの取り組みについてのアンケート依頼があり、関雄二代表幹事が回答したことが報告された。

(5) 学会員の除名について

会則第 11 条に基づき、2008 年度総会では、4 名の会員について除名審議を行うことが了承された。

(6) 共同執筆者への会誌配布（編集委員　佐藤悦夫）

会員より共同執筆者への会誌配布についての問い合わせが報告され、会則にしたがって共同執筆者への会誌配布は実施しないことが確認された。

(7) 学会ロゴについて（広報委員　伊藤伸幸）

学会ロゴの継続審議が提起され、2008 年度役員会の検討議事とすることが了承された。

(8) 旧会員からの依頼について（事務幹事　山本睦）

除名された旧会員よりホームページ上で公表されている自身の氏名の削除要請があり、これを削除、当該文章の変更を実施したことが報告された。今後、除名

者の氏名を会報ならびにホームページに掲載しないことを決定した。
（役員会議事録の要点を抄録）

2008年度第1回役員会
（第6期・第7期新旧合同役員会）

開催日時：2008年12月5日（金）15:00－17:50
開催場所：早稲田大学戸山キャンパス　39号館
　　5F　第6会議室
出席者：大貫良夫、関雄二、坂井正人、鶴見英成、
　　佐藤悦夫、伊藤伸幸、寺崎秀一郎、山本睦、
　　荒田恵、佐藤吉文、浅見恵理
委任状提出者：青山和夫、馬瀬智光、大平秀一
議　長：関雄二
書　記：浅見恵理、佐藤吉文

定足数の確認（代表幹事　関雄二）
第6期および第7期役員の出席者と委任状提出者を合わせて過半数を超えており、役員会の成立が確認された。

1.　新役員の紹介（代表幹事　関雄二）
第7期役員会の紹介が行われた。今年度より新設の運営委員として「事務幹事補佐」の設置および浅見恵理会員の当該役職任命が報告された。

2.　2007年度各委員会事業報告
（1）会誌編集・発行（編集委員　佐藤悦夫）
2007年12月に会誌『古代アメリカ』第10号を発行、第11号の編集および発行準備が実施されたことが報告された。また、会誌第10号の発行にあたり編集業務補助者計2名を採用、その業務謝礼金として計23,600円（時給800円×29.5時間）の支出があったことが報告された。
（2）会報編集
（会報委員　大平秀一：代理　旧事務幹事　山本睦）
2008年2月に会報23号、7月に第24号を編集・発行した旨が報告された。
（3）研究大会・総会（事務幹事　山本睦）
2007年12月8日に第12回研究大会が、国立民族学博物館第5セミナー室で開催され、会員44名、一般参加者23名が参加したことが報告された。また同大会が、同館開館30周年記念事業の一環として実施されたことが報告された。
（4）広報（HP）（広報委員　伊藤伸幸）
2007年度ホームページ維持費用としてサーバー利用料7,560円の支出、および同ページ管理作業補助者1名に謝礼金7,280円（1日）の支出が報告された。なお、非会員から森下美術館の名称およびホームページ・リンクの変更の指摘があり、対応した。
（5）名簿作成（事務幹事　山本睦）
名簿作成に関する日程と手順が報告された。また問題点として、会員情報フォームの返信率の低さと記入必須事項の未記入が指摘された。

以上の各部門の報告に対する審議を経て、2007年度事業報告は承認された。

3.　2007年度決算報告ならびに監査報告
荒田恵会計委員より、2007年度決算報告が行われた。また坂井正人監査委員および鶴見英成監査委員より、2008年11月23日国立民族学博物館において会計監査が実施されたことが報告された。
前役員会同様、関雄二代表幹事より会費徴収に関わる問題が指摘された。2007年度は会誌第11号の編集を事業者に委託したことで同印刷・製本費が高騰した。そのため、2008年度に向けて会費徴収の確実化が急務である点が指摘された。

以上の報告・審議を経て、2007年度会計決算報告は承認された。

4.　2008年度事業計画ならびに予算案
（1）学会誌編集（編集委員　佐藤悦夫）
会誌『古代アメリカ』第11号の発行（2008年12月）と同第12号の編集および出版準備が提案され、役員会の総意によって了承された。
（2）会報編集
（会報委員　馬瀬智光、新事務幹事　佐藤吉文）
2009年1月に会報第25号、7月に会報第26号の編集・発行が提案され、了承された。

(3) 研究大会

（研究委員　青山和夫、新事務幹事　佐藤吉文）

2008 年 12 月 6 日（土）に、早稲田大学戸山キャンパス 36 号館 681 教室において、第 13 回研究大会・総会を実施予定であることが表明され、了承された。これに伴い、大会プログラムが本役員会によって承認された。

(4) 広報・ホームページ（広報委員　伊藤伸幸）

ホームページ掲載情報の随時更新が提示され、了承された。

(5) 名簿作成（新事務幹事：佐藤吉文）

今年度の名簿作成時期について、会員情報フォームの送付を 4 月に、会員名簿の作成および発送を 5 月に実施することが提示され、役員の総意によって了承された（引き継ぎ事項の変更）。

(6) 予算案（会計委員　荒田恵）

2008 年度予算案の提示があり、以下の 2 点について審議・了承した後、原案を修正することで合意し、「会計報告」示した予算案が了承された。

・シンポジウム開催費用および会報印刷費の上昇に対応すべく、支出案の「その他」計上額の減額。

・会費収入計上額の全額回収は実質的に困難であり、これを予算案に反映させるという提案が為された。これについては前例に倣った予算案提示が了承されたが、会費滞納が現状で継続する場合、シンポジウム開催や学術情報普及に関わる戦略 WG の活動が制限される危険性も指摘された。

以上の審議をもって、2008 年度事業計画および予算案は了承された。

5. 会員について（旧事務幹事　山本睦）

新入会員、退会者、会費滞納会員、連絡先不明会員について報告が行われ、了承された。特に連絡先不明会員については、住所ないしメールアドレスが判明している会員には、事務局から情報提供を求める文書を送付することが決定された。役員が個人的に連絡先を把握している 3 名については、各役員が連絡を取ることで了承した。

6. 次期研究大会開催校について（代表幹事　関雄二）

渡部森哉会員の了承を経て、2009 年 12 月 5 日（土）に第 14 回研究大会を南山大学で開催することが決定された。

7. 引継ぎ・申し送り事項の確認

(1) 学会誌編集（編集委員　佐藤悦夫：継続）

次の 3 点が提示された。①投稿可能なテーマ・分野の拡大について、考古学/先史学だけでなく「関連諸分野」の投稿を奨励、②学会員以外への投稿者枠の拡大は認められない、③編集委員の投稿については、非投稿者である編集委員が投稿者の論文査読者を決定するなど、編集委員会内で調整することが申し合わされた。

(2) 会報編集

（会報委員　大平秀一会員から馬瀬智光会員へ交代）

当初「共催」として会員に通知した 2008 年 11 月および 12 月開催のワークショップおよびシンポジウムの「協力」名義の変更について、会報第 25 号で訂正することが申し合わされた。

(3) 研究大会

（研究委員　寺崎秀一郎会員から青山和夫会員へ交代）

次回大会で掲示・配布するポスターおよびチラシに使用する写真は発表者に提供してもらうことが申し合わされた。

(4) 広報・ホームページ（広報委員　伊藤伸幸：継続）

学会ロゴの検討・作成問題が継続審議事項として表明された。

(5) 名簿作成

（事務幹事　山本睦会員から佐藤吉文会員へ交代）

実用的な会員名簿を作成するため、会員による最低限の情報提供（現住所、電話番号）意識の向上を促すことが了承された。さらに名簿作成時期について、会員情報フォームの作成協力依頼を 2009 年 3 月に、回答締め切りを 4 月上旬に、会員名簿の発送を同月中に実施することを申し合わせた。

以上のように、前期役員会と次期役員会との間での引継ぎ・申し合わせ事項が確認された。

8. その他（代表幹事　関雄二）

(1) 学術情報の普及について

昨年度の総会で提案された「教科書におけるアメリカ大陸の古代文明の記述の充実化」への対応として、一般社会への学術情報普及を主目的に、「学術情報の普及に関わる戦略検討ワーキンググループ（以下 WG）」の発足と、学会主催シンポジウムの開催を総会に提案することで一致した。WG は、本問題を提起した青山会員を中心にメンバーを構成し、2009 年 9 月末日までに答申を提出することが決定された。

(2) シンポジウムの協力名義について

会員による本学会のシンポジウム協力要請 2 件について報告された。いずれも事業計画に組み込まれていないこと、さらに 1 件については申請者側より名義変更の希望が出され、「主催」「共催」ではなく「協力」となったことが報告された。

(3) 公益法人に関するアンケート

内閣府公益認定等委員会による公益認定ガイドラインの策定に関連して、日本学術会議「学協会の公益機能検討等小分科会」よりアンケート依頼があり、関雄二代表幹事が回答したことが報告された。

(4) 国際コンソーシアムへの取り組みについて

日本学術会議より本会の国際コンソーシアムへの取り組みについてのアンケート依頼があり、関雄二代表幹事が回答したことが報告された。

(5) 機関別認証評価委員会専門委員候補者の推薦について

独立行政法人大学評価・学位授与機構より本会に対して機関別認証評価委員会専門委員候補者の推薦依頼があり、本会では当人の了承を得て青山和夫会員を推薦したことが報告された。

(6) 学会員の除名について

会則第 11 条に基づき、2008 年度総会では、4 名の会員について除名審議を行うことが了承された。

(7) 共同執筆者への会誌配布（編集委員　佐藤悦夫）

会員より共同執筆者への会誌配布についての問い合わせが報告され、会則にしたがって共同執筆者への会誌配布は実施しないことが確認された。

(8) 学会ロゴについて（広報委員　伊藤伸幸）

学会ロゴの継続審議が提起され、2008 年度役員会の検討議事とすることが了承された。

(9) 旧会員からの依頼について（旧事務幹事　山本睦）

除名された旧会員よりホームページ上で公表されている自身の氏名の削除要請があり、これを削除、当該文章の変更を実施したことが報告された。今後、除名者の氏名を会報ならびにホームページに掲載しないことを決定した。

(10) 非会員研究大会参加費（旧事務幹事　山本睦）

研究大会資料印刷費の名目で一人当たり 500 円の参加費を徴収することが提案され、了承された。

以上をもって、2008 年度第 1 回役員会（第 6 期、第 7 期新旧合同役員会）は予定していたすべての議事の審議を終了した。

（役員会議事録の要点を抄録）

第 13 回総会報告

第 13 回総会議事録

開催日時：2008 年 12 月 6 日（土）17：00－18：10
開催場所：早稲田大学戸山キャンパス 36 号館
6 階　681 教室

議長：井口欣也（埼玉大学）
書記：浅見恵理（総合研究大学院大学）

1. 開会挨拶（会長　大貫良夫）

総会開会の挨拶があった。

2. 定足数の確認（代表幹事　関雄二）

出席者 34 名、委任状提出者 77 名、合計 111 名となり、会則第 19 条に記された会員数（175 名）の過半数という条件を満たしているため、総会が成立する。

3. 議長並びに議事録署名人の選出（代表幹事　関雄二）

立候補および他薦がなかったため、役員会が井口欣也会員(埼玉大学)を議長に推薦し、会員の承認を経て、同氏が選出された。また、議事録署名人には鵜澤和宏会員（東亜大学）および清家大樹会員（筑波大学大学院博士課程）が選出、承認された。

4. 役員選挙報告ならびに承認(選挙管理委員長 馬瀬智光)

選挙結果の報告が行われ、承認された。

5. 新役員の紹介（代表幹事　関雄二）

新役員の紹介および新運営委員として事務幹事補佐の設置に関する説明が行われ、承認された。

6. 2007 年度事業報告

役員会で承認された、会誌『古代アメリカ』第 10 号の発行、会報 23･24 号の発行、第 12 回研究大会・総会の開催、第 13 回大会の準備、ホームページの維持・更新、名簿作成に関して報告され、会員からの承認を得た。

なお、会誌の充実を図るため会員による積極的投稿が呼びかけられた。また、名簿作成に関して、会員情報フォームの回答率が低い点、あらゆる情報の掲載を「非」とする例や、本来事務局側が連絡用に把握すべき基本情報を無記入とする例が報告され、事務局と会員の間の連絡関係を維持するための基本情報の積極的提供が呼びかけられた。

さらに、渡部森哉会員から、会誌編集作業上必要なため、会員メーリングリスト（以下、ML）に関する現状確認と要望が出された。これに対して、事務局は、会員 ML の構築に努めることを表明した。

7. 2007 年度会計報告および監査報告

（1）2007 年度会計報告（会計委員　荒田恵）

「会計報告」に示したとおり、2007 年度決算報告が行われた。

（2）2007 年度監査報告（監査委員　坂井正人）

2008 年 11 月 23 日に国立民族学博物館において、坂井正人委員および鶴見英成委員が監査を行い、適正な会計収支が行われたことが報告された。

議長によって 2007 年度会計報告について承認の確認が行われ、会員の承認を得た。

8. 2008 年度事業計画（代表幹事　関雄二）

役員会で承認された、会誌『古代アメリカ』第 11 号の発行、第 12 号の準備、会報 25･26 号の発行、第 13 回研究大会・総会の開催、ホームページの維持・更新、名簿作成に関して報告された。

さらに、佐藤吉文事務幹事より学会主催シンポジウムの実施が提案された。これに関連し、関雄二代表幹事より、中南米古代史の教科書記述問題に対する役員会の答申が示され、「学術情報の普及に関わる戦略検討ワーキンググループ（以下 WG）」を役員会のもとに発足させ、教科書記述問題を含めた学術情報普及戦略を検討することが提案された。

この WG の具体的な活動内容について青山和夫会員から質問が出され、役員会は、WG による活動内容の具体案の模索を依頼した。

また、渡部森哉会員より、会誌の「会員の活動状況」の該当期間を年度対応に変更するという提案が為された。これに対し、佐藤悦夫編集委員より、現行の準備作業でも上記の提案に対応可能であると回答された。また関雄二代表幹事より、本提案は編集委員会での審議後、役員会審議事項として処理できる旨が伝えられた。

以上の審議を経て、2008 年度事業計画は会員の承認を得た。

9. 2008 年度予算案【追加資料】

「会計報告」に示したとおり、2008 年度予算案が提示され、会員の承認を得た。

なお、加藤泰建会員より、会誌収入備考欄の記述形式の不適切さが指摘され、修正事項が了承された。

また、関雄二代表幹事より、会費滞納の実情と計画事業未達成の危険性が指摘された。

加藤泰建会員より、長期未納会員の除名に関する質問が提出され、関雄二代表幹事より、後ほどその報告がある旨が伝えられた。

以上の審議を経て、2008 年度予算案は会員の承認を得た。

10. 会員状況報告（事務幹事　佐藤吉文）

2008 年 11 月 19 日現在の会員数は 175 名で、2007 年度の新入会員が 7 名、退会者が 4 名、退会希望者 1 名、除名者 1 名であったことが報告された。

11. 次期大会開催校（代表幹事　関雄二）

第 14 回研究大会・総会の開催日時および場所が、2009 年 12 月 5 日（土）、南山大学に決定したことが報告され、大会運営に協力する渡部森哉会員より挨拶があった。

12. その他（代表幹事　関雄二、事務幹事　佐藤吉文）

役員会は学術情報の普及に伴うＷＧの組織化を青山和夫会員に要請し、同氏はこれを了承した。同時に、ＷＧは 2009 年 9 月までに答申を役員会に提出することが決定された。この他、シンポジウムの共催名義から協力名義への変更、公益法人に関するアンケートへの回答、国際コンソーシアムへの取り組みに関するアンケートへの回答、機関別認証評価委員会専門委員候補者の推薦依頼と青山和夫会員の推薦、共同執筆者への会誌と抜き刷りの配布、学会員の除名、学会ロゴ、除名者氏名の会報およびホームページへの非掲載、非会員研究大会参加費の徴収に関する報告がなされ、承認された。

13. 会長挨拶（会長　大貫良夫）

参加した会員ならびに一般参加者、そして発表者への謝辞が述べられた。

議長の井口欣也会員によって閉会の辞が述べられ、拍手をもって総会を終了した。

第 13 回研究大会報告

2008 年 12 月 6 日（土）に早稲田大学戸山キャンパスで開催された第 13 回研究大会の発表者と発表題目は以下のとおりです。なお、当初予定されていた大平秀一会員（東海大学）による「エクアドル南部におけるインカのミティマ：ムユプンゴ領域の遺物と民族誌」は、発表者の事情によりキャンセルとなりました。

－調査速報の部－

①「エル・サルバドル共和国
レンパ川下流域発掘調査速報」
市川　彰（名古屋大学大学院博士前期課程）
伊藤伸幸（名古屋大学）
柴田潮音（エル・サルバドル文化芸術審議会考古課）

②「エル・サルバドルのチキリン貝塚調査について」
伊藤　伸幸（名古屋大学）

③「コパン考古学プロジェクト調査速報 2007–2008」
寺崎　秀一郎（早稲田大学）

④「ペルー・インガタンボ遺跡出土遺物の分析」
山本　睦（総合研究大学院大学博士課程/
日本学術振興会特別研究員 DC2）

⑤「ペルー北部中央海岸セロ・ブランコ及び
ワカ・パルティーダ遺跡出土の自然遺物の分析」
芝田　幸一郎（法政大学）

⑥「ペルー、パコパンパ遺跡から出土した
人骨の形態人類学的研究」
長岡　朋人（聖マリアンナ医科大学）

⑦「パコパンパ遺跡の景観構造と変容」
坂井　正人（山形大学）

⑧「ペルー北部カハマルカ地方、
エル・パラシオ遺跡の発掘調査」
渡部　森哉（南山大学）

－ポスターセッション－

⑨「北部ペルー、アマカス平原における遺跡と地形の
三次元復元図の作成および GIS による分析」
伊藤　裕子
（東京文化財研究所文化遺産国際協力センター）
鶴見英成（埼玉大学）
金子勇太（国際航業株式会社）

－研究発表の部－

⑩「後古典期ナワ人にとっての境界と儀礼」
井上　幸孝（専修大学）

⑪「マヤ文明の石器研究（1986–2008）」
青山　和夫（茨城大学）

⑫「ワルパとナスカ：中央アンデス前期中間期末期の
山地民と海岸民の関係をめぐって」
土井　正樹（京都文教大学）

⑬「移転・拡張・放棄：ペルー北部、
アマカス複合遺跡における神殿更新活動の展開」
鶴見　英成（埼玉大学）

⑭「アンデス先史文化におけるサル」
鵜澤　和宏（東亜大学）

⑮「アンデス形成期における神殿建築の変容課程
―クントゥル・ワシ神殿の３Ｄモデル化による分析
から―」
井口　欣也（埼玉大学）

会計報告

古代アメリカ学会　2007 年度決算報告（2007 年 10 月 1 日－2008 年 9 月 30 日）

収入の部

項目	予算額	決算額	増減	備考
[redacted]		[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]		[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]		[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]		[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]		[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]		[redacted]	[redacted]	

[redacted]

[redacted]				
[redacted]		[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]		[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]	
[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]	
[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]	
[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]	
[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]	

[redacted]

[redacted]		
[redacted]	[redacted]	[redacted]

[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]	[redacted]		
[redacted]		[redacted]	
[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]

[redacted]

[redacted]

[redacted]		
[redacted]		
[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]	[redacted]	

[redacted]

[redacted]		
[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]	[redacted]	[redacted]
合計	[redacted]	

新入会員

2008 年 6 月 21 日から 2009 年 1 月 31 日までの役員会（メールを含む）で以下の方々の入会が承認されました。会員数は現在 170 名となっております。

・[redacted]

事務局からのお知らせ

１．会費納入のお願い

2008 年度までの会費が未納となっている方は、同封いたしました振込用紙でお振込み下さい。古代アメリカ学会は会員の皆様の年会費で運営されております。ご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。なお、2006 年度以前にさかのぼり、会費が未納となっている会員につきましては、会誌・会報の発送を見合わせております。

２．会報への投稿募集

『会報』第 26 号への原稿を募集します。研究随想、研究ノート、フィールドワーク便りなどテーマは自由で、字数は 2000～3000 字程度です。締め切りは、5 月末日と 11 月末日の年 2 回となります。掲載の可否については、事務局にご一任ください。

３．会誌バックナンバー販売のお知らせ

『古代アメリカ』のバックナンバーを 1 冊 2000 円で販売しております。購入をご希望の方は、ご希望の号数、冊数を古代アメリカ研究会事務局までお知らせ下さい。会誌と振込用紙をお送りいたします。なお、第 3 号は品切れとなっております。また他に残部希少の号もございますので、品切れの際はご容赦下さい。

４．以下の会員の方々の転居先、及びメールアドレスが不明となっております。転居先をご存じの方は、事務局(jssaa@sa.rwx.jp)までお知らせ下さい。

・[redacted]　・[redacted]
・[redacted]　・[redacted]
・[redacted]

＜編集後記＞

今回の会報については，公務多忙につき会員のみなさまには大変ご迷惑をおかけしました。幸いにも山本睦さんのご協力を得て完成させることができました。また，荒田恵さんのご助力にも感謝致します。

さて私事ですが，一頃より減ったとはいえ，現在全国には 6 千人余りの埋蔵文化財技師がおり，日夜日本の文化財の保護に努めております。遺跡を消滅させた件数では，直接行政指導したものに直接手を下した（調査した）ものも加えると，私は 6 千人の中でも指折り数えるくらい上位に来ると思いますし，それだけの業を背負っていると考えます。この学会に所属されている方の多くは，生涯に一種の破壊である発掘調査（それ以上に成果も大きいのですが）に従事したとしても多くて十数件だと思います。一方，私の消滅させた件数は直接手を下したものでも 1 千件近く，直接行政指導した件数は 1 万件をはるかに上回ります。他の方々に経験していただきたくないことではありますが，保護の最前線で長年従事してきた私は，少し異なる視点を提供できるかもしれません。また，運良く残されたわずかな遺跡も，近隣住民から邪魔者扱いを受けるという現実も日々経験しております。研究から還元へ，そしてファンだけでなく文化財を「よけいなもの」だと考える人達にも理解を広げて頂くような活動になることを心から期待しております。研究に貢献することはできませんが，今後ともよろしくお願いします。

（馬瀬智光）

＜表紙写真提供：馬瀬智光＞

発行　古代アメリカ学会
発行日　2009 年 3 月 17 日
編集　馬瀬智光
古代アメリカ学会事務局
〒565－8511 大阪府吹田市千里万博公園 10－1
国立民族学博物館 [redacted]
電話：[redacted]
Fax ：[redacted]
E-mail：jssaa@sa.rwx.jp
郵便振替口座：00180－1－358812
ホームページ URL　http://jssaa.rwx.jp/